

フィールドワーク便り

人民戦争を生きた治療師たち

中 村 友 香*

2014年10月、私はネパール中西部のロールパ郡タバン村にいた。タバン村とその周辺地域で広く頼りにされているという有名な接骨師たちに会うため、この地へやって来たのだ。タバン村は首都カトマンズから西に270キロ程度の所に位置する山間の農村である。近年の道路建設の進行により村に向かう道は改善され、車が通ることができる道まで約1日半で、首都には車と徒歩合わせて約3日で行くことができるようになった。雨季の終わりの土砂崩れがネパールの他の山間地帯と同様に頻発した後で、山道に行く私たちの歩みをしばしば遅らせたが、いくつかの峠を越えた先で、石畳の美しい村が迎えてくれた。タバン村の中心集落には石を積んで作られた家々が並び、収穫されたトウモロコシが干され、放し飼いされた鶏や山羊たちが自由に行き来している。標高約2,000メートルに位置する村からは深い谷を流れるタバン川を臨むことができた。

タバン村周辺の治療師たち

現在タバン村と周辺地域には、古くから病氣や治療に関する知識人として村人に関わっ



写真1 タバン村

てきた民間の治療師たちがたくさんいる。

「村人のほとんどが治療師の親族だよ。そのくらいたくさん治療師がいるんだ。」

という村人の言葉のとおり、タバン村につくと村人たちは次から次へと自分の親戚が治療師だとか、知り合いの誰それが治療師の弟子になったらしいと語った。治療師たちの実践は多様で、当初私が会うことになっていた接骨師をはじめさまざまな治療を行なう治療師がいることがわかった。ここでは、まずその種類と特徴を紹介したい。

①接骨師

接骨師は骨折や脱臼を専門としている治療師である。彼らは他の接骨師から技術を学ぶ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真2 骨を触診する接骨師

とともに実践を通して技術の改善を行ない続けている。レントゲンを使わずとも、触診によって骨折や脱臼を判断し、マッサージや骨の位置の調節（押ししたり引っ張ったり）、竹で作ったギプスによる固定などによって治療を行なう。

山岳地帯で生活の場の多くが急な斜面であること、家畜のえさの採取のために木に登る機会が多いこと、また特に雨季には足場が悪く転倒や土砂崩れの被害が多いことなどから怪我は多く、現在に至るまで接骨師たちの仕事は絶えない。

②ジャイシ（伝統治療師）

ジャイシはこの地域の伝統治療師を指し、薬草やマントラ（呪文）を使って治療を行なう。村社会の中で尊敬される役割であり、人の役に立ち尊敬されるような仕事をしたいと考えた人々がこの仕事につくようだ。

ジャイシになるにはまず師を選び弟子に入る必要がある。師は経験を積んだ他のジャイシの中から自ら選ぶことができる。ジャイシになりたい旨を表明し、師に受け入れられればジャイシになる修行が始まる。修行はま

ず、マンガル語の読み書きをすることから始まる。マンガル語とはこの地域の古語であり、公用語であるネパール語や、タバン村周辺に住むマガル人の言語であるカム語とは異なる言語であると説明された。マンガル語を学ぶと、初めて弟子たちは師からマンガル語で書かれた治療とマントラの本を借りて、写すことができる。この本はポストコと呼ばれ、さまざまな病気の種類と治療法、そのとき唱えるべきマントラの内容などが書かれたものである。確認できた最も古いポストコは1762年に書かれたと記されたものであった。ポストコをたくさんもっていればいるほど多くを学んだ偉大なジャイシと判断される。

ポストコをもとに行なわれる治療はさまざまで、薬草や鉱物、動物の骨を使ったものやマッサージなどが行なわれる。彼らは風邪、関節痛、怪我、筋肉の硬直、黄疸（肝疾患）、てんかん、結核、蛇にかまれた、精神疾患、狂犬病、淋病、不妊の治療から、「悪霊と戦



写真3 ポストコをみせてくれたジャイシのジェッド氏



写真4 マンガル語で書かれたポストコ



写真5 ジャンクリが祈祷に使用するベルや動物の皮

う」「好きな相手が自分に惚れるようにする」「怒らせた相手の怒りを鎮める」などの術まで幅広い実践を行なっている。

③産婆

産婆は年配の女性が多く、主に難産の介助をする役目や出産前後の問題に対処する役割をもつ。ネパール全体の60%、タバン村の80%が公的医療機関で出産を行なうといわれている現在、仕事は激減しているという。しかしながら話を聞いてみると医療機関に劣らない出産に関する技術が隠されていることがわかる。

「お尻から生まれる場合（逆児のこと）、手を入れて赤ちゃんの両足をつかんでくると回すと生まれてきますよ。」

とジェスチャー付きで述べるほかに、遷延性横位分娩（片腕から出産すること）の成功の経験もあった。遷延性横位分娩は西洋医学でも自然分娩が困難で救命の方法は緊急帝王切開しかないといわれている。ネパールの山

村では医療機関にアクセスしても手術可能な施設がなく母子ともに亡くなるケースが多い。彼らは少なくとも2件の遷延性横位分娩を経験し、そのうち1件は母子両方の、残り1件でも母親の命を救ったという。また、その他マッサージによって分娩前に逆児を治したり、薬草などを使って後産を促すなどの実践を行なっている。

④ダミ／ジャンクリ（祈祷師）

ダミ／ジャンクリはこの地域の祈祷師のことを指し、主に呪文や祈祷、薬草によって治療を行なう。ジャイシとは異なり師から技術を学ぶことは少なく、神の声や夢から病気に関する知識や治療の技術、薬草の生えている場所や効能について学ぶ。治療を行なう際には、太鼓やベルを鳴らして祖先や土地の神を呼んで自らに憑依させて声を聞いたり、お香をたいて悪霊を払う。彼らは感染症に対する薬草の処方から、悪霊払いまで幅広い治療を行なう。

人民戦争

培ってきた治療法や薬草の知識、長年の治療師としての経験やエピソードを私が尋ねると、治療師たちは楽しそうに語ってくれた。その一方でしばらく話しているとぼつぼつと思いがけず出てくる話題もあった。人民戦争時代の話だ。

人民戦争とは、ネパールで 1996 年から 10 年にわたりマオイストが中心となっていた行われた反政府武装闘争のことである。マオイストとはネパール共産党毛沢東主義派の人々のことを指すが、彼らはロールパ郡とその北部のルクム郡を武装闘争基地とし、勢力を全国規模にまで拡大していった。1996 年当初はマオイストのゲリラ部隊と警察・武装警察部隊の攻防にとどまっていた。しかしながら 2001 年にネパール国軍が投入され、政府側の残虐な制圧行為がかえって人々の反体制感情を煽ったことも重なり、無関係な村人を含む 1 万 3,000 人を超える死者を出す深刻な内戦になっていった。2006 年の平和合意の後、マオイストは武装闘争を離れ議会政党になり、2008 年の制憲議会選挙で第一党、2013 年の制憲議会選挙においてはネパール会議派、ネパール共産党統一マルクス・レーニン派に次ぐ第三党となった。

このマオイストの一連の動きを支えたのがタバン村である。タバン村はかつてマオイストの首都と呼ばれ武装闘争のベースキャンプとして党大会や党中央委員総会などの重要な会合を経験し、ほぼすべての村人たちはマオイスト、またはその支持者となったとさえいわれる。マオイストとなって襲撃へ向かった



写真 6 タバン村に書かれた毛沢東らの壁画

者たちだけでなく、村にとどまった女性や子どもを含む支持者たちも軍の襲撃の犠牲となり、人々は森の中での避難生活を余儀なくされた。

治療師たちと人民戦争

このような状況の中、タバン村とその周辺地域の治療師たちもさまざまな立場で人民戦争を経験していた。

「私は人民戦争で 11 人の弟子を亡くしました。」

とタバン村周辺で偉大なジャイシとして有名なジェッド氏は言う。彼は、彼自身が治療師を続けながらマオイストのミーティングに参加していたこと、14 人いた弟子のすべてが村人たちの経済や教育や健康の平等と差別撤廃を目指してマオイストになったこと、そのうちの 11 人が人民戦争によって亡くなり、残りの 3 人は今でもマオイストとして活動し続けていることを語った。他の治療師たちもマオイストの主要メンバーとして人民戦争に参加したこと、治療師の傍らマオイストとしての活動をしたこと、マオイスト専属

の治療師として人民戦争に動員されたこと、村にいてマオイストとネパール国軍の双方の治療を行なったことなどさまざまな体験を語った。

またマオイストであるナムジェ氏は、

「私たちは治療師の活動を否定しませんでした。伝統的な薬草の知識は素晴らしいものであり、その知識を進んで取り入れようと思いました。マントラや祈祷などは精神には訴えかけますが、科学的でないという理由でそれを行なう治療師たちに教育を施すことはしていませんでした。しかしながら私たちは彼らの仕事自体を否定することはしませんでした。」

と語る。社会主義下に置かれた国々では、宗教活動に対して否定的な態度が示され、モンゴルやロシアなどをはじめとする国々ではそれに伴って伝統医療に対する圧力が加えら

れた。一方マオイストの勢力下に置かれたタバン村ではヒンドゥー教に対してこそ否定的な態度がみられたものの、独自のマントラや神と結びついた治療師たちの実践は必ずしも否定されなかった。マオイストと治療師たちは対立関係に置かれていたわけではなかったようだ。

2006年の平和合意後、タバン村では公的医療機関での出産奨励政策や交通機関の発達によって都市の医療機関を頼る人口が増加し、伝統治療師をとりまく状況は変化し続けている。しかしながら彼らは単に古くからの知識を継承する消えゆく存在とはいえない。人民戦争というネパールの激動の時代を生き、た彼らはまた、新たな時代とともに立場を変えながらも生き続けるのではないだろうか。

「客人たちの父」預言者イブラーヒームのおもてなし

—パレスチナ自治区・ヘブロン／ハリールの食事配給施設を訪ねて—

山 本 健 介 *

2つの名をもつ町

パレスチナ自治区の町・ヘブロン (Hebron) ／ハリール (al-Khalil)。2つの名で知られるこの町は、ヨルダン川西岸地区の南方に位置

し、セム的一神教の祖、預言者イブラーヒーム (アブラハム) と深い関わりをもつ。ヘブロン、ハリールという名は、それぞれヘブライ語、アラビア語で「友」を意味し、イブ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科